

神のことばは、ますます広まって

使徒の働き 6章 1-7節

はじめに

先週の日曜日の礼拝後に、臨時の信徒総会が開かれ、教会堂の1階をリフォームすることを決議しました。コロナ後の2023年に「子ども食堂」を再開し、2024年には高齢者のための「オレンジカフェ」を始め、今年は「マンナ食堂」も始めました。これらは、教会堂の1階を使い、地域に開いた「宣教の働き」です。「宣教の働き」と言っても、お祈りをしたり、讃美をしたり、聖書のメッセージを語るわけではありません。そのおもな目的は、地域の人々の貧困や孤食のための支援であり、人々との繋がりを作るためのものです。つまり「愛の奉仕」と言えます。

私自身は、「宣教」というものを広い意味で捉えています。私自身は、「宣教」を「伝道」と同じ意味で捉えていません。私自身は、「宣教」というのは「伝道」よりも広い働きだと考えています。「伝道」は、人々に福音を伝え、救いに導く働きです。一方、「宣教」は、「伝道」と「愛の奉仕」を含む働きだと考えています。「愛の奉仕」とは、社会的な救済をする働きですが、私たち福音派の教会では、「社会的責任」と呼ばれることもあります。

1974年に開かれた「ローザンヌ世界伝道会議」において、世界の福音派の教会は、「伝道」と「社会的責任」の両方を教会の使命とすることを確認したのです。それまで、福音派の教会は、「伝道」こそが教会の使命としてきました。逆にリベラル派の教会は、「社会的責任」こそが教会の使命としてきました。福音派の教会は、リベラル派を警戒するあまり、「伝道」に重点を置き、「社会的責任」や「愛の奉仕」を教会が行うことは、非聖書的なことだとさえ考えられていたのです。しかし、「ローザンヌ世界伝道会議」において、日本を含む世界の福音派の教会は、「伝道」と「社会的責任」の両方を教会の使命とすることを確認したのです。つまり教会の「宣教の働き」とは、「伝道」と「愛の奉仕」の両方を含むことだと確認したのです。

ただし、「ローザンヌ世界伝道会議」では、教会にとって「伝道」と「社会的責任」はどちらが優先する働きかと言えば、「伝道」であるということも確認したのです。つまり教会は、「伝道」と「愛の奉仕」の両方の働きをするべきだけれど、「伝道」こそが第一にすべきことであるということです。

今日は、教会にとっての「伝道」と「愛の奉仕」の関係を、世界で最初にできた制度的教会であるエルサレム教会から学びたいと思います。

1. エルサレム教会におきた問題

エルサレム教会は、成長するにつれて一つの問題が起きました。1 節にはこうあります。「**そのころ、弟子の数が増えるにつれて、ギリシア語を使うユダヤ人たちから、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情が出た。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給においてなおざりにされていたからである。**」

エルサレム教会に起きた問題は、ギリシア語を使うユダヤ人のやもめが、毎日の配給でなおざりにされていたという問題です。エルサレム教会には、教会の中に二つのグループがあったようです。一つはヘブル語を使うユダヤ人で、もう一つはギリシア語を使うユダヤ人です。両方ともユダヤ人でしたけれども、言葉が違ったのです。

ギリシア語を使うユダヤ人というのは、外国で生まれ育ったユダヤ人です。彼らは外国で生まれ育ったので、当時の公用語であった「ギリシア語」を使ったのです。彼ら「ヘレニスト」と呼ばれていて、ユダヤ人のもとの言語であるヘブル語やアラム語をほとんど話せなかったようです。彼らの中には、夫を亡くしたやもめがいました。彼らは外国で暮らしていましたが、人生の最後はユダヤ人の聖地エルサレムで過ごしたいと願って、年老いてからエルサレムに移り住んで来たようです。

ヘブル語を使うユダヤ人というのは、ヘブル語やアラム語を使うユダヤ人で、彼らは「ヘブル人」とも呼ばれていました。使徒たちも、ヘブル語を使うユダヤ人でした。

このようにエルサレム教会には、二つのグループがあったのです。教会の中に言語や生まれ育った国が違う人たちが集まると、言葉の壁や文化や価値観の違いを経験することもあります。時には、それが原因で衝突が起こることもあります。エルサレム教会もそのような違いによって問題が起こったのです。しかしエルサレム教会は、その問題を適切に解決し、さらに成長する教会となっていったのです。7 節を見ると、「**こうして、神のことはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。また、祭司たちが大勢、次々と信仰に入った**」とあります。教会は、必ず問題が起きます。それは、救われてもなお罪を持つ人間の共同体ですから避けられません。しかし神様は、起きた問題を通して私たちを訓練し、さらに成長する教会へと整えていかれるのです。

2. エルサレム教会における愛の業

エルサレム教会に起きた問題は、ギリシア語を使うユダヤ人のやもめが、毎日の配給でなおざりにされていたという問題です。エルサレム教会は、貧しい人などの生活に困窮している人たちの生活を支える「愛の奉仕」を行なっていました。教会の中で比較的裕福な人たちは、自分たちの土地や財産を売って献金し、それを使徒たちは、貧しい人たちの生活の必要のために分配していたのです。

使徒たちは、決して「伝道」だけをしていたわけではありません。彼らは「愛の奉仕」も行なっていたのです。彼らは、人々の霊的な必要のためだけに奉仕していたわけではありません。彼らは、人々の肉体や生活の必要のためにも奉仕していたのです。エルサレム教会は、「伝道」だけでなく、「愛の奉仕」も行なう教会であったのです。

しかし、エルサレム教会は、教会が成長するに従って、「伝道」と「愛の奉仕」のバランスが崩れていってしまったのです。これまで「伝道」も「愛の奉仕」も、十二人の使徒たちが行っていたのです。しかし、教会に貧しい人などの生活に困窮している人たちが増えるに従って、それらの人たちに対する「愛の奉仕」の必要も増えていったのです。そのため、十二人の使徒たちだけでは、十分に奉仕できなくなり、結果的に「愛の奉仕」も疎かになり、「伝道」も疎かになる危機に直面していたのです。

3. 祈りとみことばの奉仕に専念した

では、エルサレム教会は、この問題をどのように解決し、乗り越えていったのでしょうか。この場合、三つの選択肢があったように思います。①「愛の奉仕」を止めて、「伝道」だけを行なう。②「伝道」を止めて、「愛の奉仕」だけを行なう。③働き人を増やして、「伝道」も「愛の奉仕」も行なう。

エルサレム教会が選択したのは、三つ目の、働き人を増やして、「伝道」も「愛の奉仕」も行なうという方法でした。2節以下には、このようにあります。「**そこで、十二人は弟子たち全員を呼び集めてこう言った。『私たちが神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くありません。そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。その人たちにこの務めを任せることにして、私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します』**」。

エルサレム教会は決して、「愛の奉仕」は教会にとってどうしても必要なものではないから止めようとか、「愛の奉仕」は霊的な奉仕ではなく、肉体や生活の必要のための奉仕だから止めようということにはなりません。彼らは、「愛の奉仕」は教会にとって必要な働きであるので継続したい、継続するために何とか方法はないかと祈りつつ知恵を求めた結果、使徒たち以外の七人の働き人を選び、彼らに「愛の奉仕」を行なってもらうことにしたのです。

教会にとって「愛の奉仕」は必要な働きです。しかし、それは「伝道」よりも、また「祈りとみことばの奉仕」よりも重要な働きかと言えば、そうではありません。教会にとって最も大切な働きは、「祈りとみことば」の奉仕であると言えます。使徒たちは、「伝道」か「愛の奉仕」かを選択する時、自分たちは「伝道」に専念し、他の働き人たちに「愛の奉仕」を委ねたのです。エルサレム教会は、「神のことばを後回しにして、食卓のことに仕えるのは良くない」という原則を知っていたのです。「愛の奉仕」は、教会にとって必要な働きです。しかし「神のことば」や「伝道」を後回しにしてまですることではありません。「祈りとみことば」または「伝道」は、教会にとって第一義的なものであり、「愛の奉仕」は二義的なものであると言えます。

「教会」とは何でしょうか？教会にとって、どうしても欠かせないものは、「神のことば」です。「伝道」を行なわなくなったら、教会が教会ではなくなります。「伝道」をしないで、「愛の奉仕」だけを行なっている教会を教会と呼べるのでしょうか？それは、教会ではなく福

社団体です。しかし「愛の奉仕」は教会にとって不可欠な働きです。それは、「神のことば」に説得力を持たせるからです。教会がいくら「神様はあなたを愛している」と言葉で語っても、教会が実際に隣人を愛する働きを行なっていなかったら、言葉だけ、頭だけ、口だけの宗教となってしまいます。教会は、「愛の奉仕」の実践があって初めて、神様の愛を説く「福音」に説得力をもっていくのではないのでしょうか。

ある人は言うかもしれません。エルサレム教会は、あくまでも教会内の信徒のための「愛の奉仕」を行ったのであって、教会外の未信者のための「愛の奉仕」を、本当に教会は行うべきなのでしょうか。私たちの教会が属している日本長老教会は、「愛の奉仕」を行う職務として、「執事」という職務を設けています。それに対して「伝道」を行う職務として、「牧師」を設け、「牧会」を行う職務として、「長老」という職務を設けていると言えます。日本長老教会の「憲法」の中には、こういう言葉があります。「**罪からの救いの福音は、隣人と社会への愛と奉仕をもたらすものであるため、教会は執事職を通じて教会の外にも働きかける**」(憲法総則 9:41)。福音を信じた者は、決して教会の中に留まることなく、必ず教会の外にいる隣人と社会への愛と奉仕をもたらすようになると、はっきりと書かれています。「神のことば」は、決して教会内に留まることなく、教会の外に向けて「伝道」という形で現れます。同じように「愛の奉仕」も、決して教会内に留まることなく、教会の外に向かうはずなのです。「福音」の力は、決して教会内に留まるものではないのです。

エルサレム教会は、「神のことば」を最優先にしました。使徒たちは「祈りとみことば」に専念しました。しかし、「愛の奉仕」も他の働き人によって継続しました。その結果、エルサレム教会はどうなったのでしょうか？7節にはこうあります。「**こうして、神のことばはますます広まっていき、エルサレムで弟子の数が非常に増えていった。また、祭司たちが大勢、次々と信仰に入った**」。

エルサレム教会は、「神のことば」を最優先にして、使徒たちが「祈りとみことば」に専念しました。そして、「愛の奉仕」によって隣人を愛し、「神のことば」を愛の実践によって証ししていきました。つまりエルサレム教会は、「神のことば」と「神の愛」を言葉と行ないの両面で人々に証していったのです。その結果、エルサレム教会は、さらに成長する教会となっていったのです。

おわりに

教会にとって「愛の奉仕」は、必要不可欠な働きです。「伝道」よりも優先する働きではありませんが、「伝道」の働きを強め、説得力を持たせていく働きです。私たちは「神様の愛」を、ことばだけでなく、目に見える行動で、実践を通して証ししていかなければなりません。ヤコブは、こう言いました。「**兄弟か姉妹に着る物がなく、毎日の食べ物にも事欠いているようなときに、あなたがたのうちのだれかが、その人たちに、『安心して行きなさい。温まりなさい。満腹になるまで食べなさい』と言っても、からだに必要な物を与えなければ、何の役に立つでしょう。同じように、信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです**」(ヤコブ 2:15-17)。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、イエス様の十字架と復活を通して、「神様の愛」を知りました。イエス様は、ご自身の身をもって、「神様の愛」を証しされました。私たちも「愛の奉仕」を通して、「神様の愛」を証しすることができますように。教会の第一の働きである「伝道」を強めてください。「伝道」のためにも、「愛の奉仕」を用いてください。

この夏、「伝道」と「愛の奉仕」を含む「宣教の働き」のために、教会堂の1階のリフォームをすることを教会で決めました。あなたの御心にかなっているなら、すべての必要を満たしてくださり、このリフォームを通して、あなたのことがますます広まるようにしてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。